保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 29

『火垂るの墓』

迫とみや
(比治山大学)

これまで本エッセイでは漫画作品を扱ってきましたが、今回は少し趣を変えてアニメ映画『火垂るの墓』（高畑勲 1988 原作：野坂昭如 1968）をもとに、戦争について、児童福祉の課題について、考えたいと思います。戦後 80 年の節目を迎える今年、参議院選挙では日本の核武装や徴兵制を主張する国政政党が躍進しました。社会や時代状況の変化の中で、本エッセイを通して何かを考えるきっかけが掴めればと考えます。

『火垂るの墓』は戦時下の神戸で親を失った兄妹の短い夏のアンソロジー。「戦争の悲惨さ」「かわいそう」だけでなく、子どもらしい清々しい感性も見ることができ、それが一層のはかなさと哀しさを誘います。本作品はまた「子どもの生存を誰がどう支えるのか」という児童福祉の問題を突きつける作品でもあります。

昭和 20 年 9 月 21 日夜、ぼくは死んだ。

物語冒頭で主人公の兄、清太は神戸三宮の駅舎で倒れ、最期を迎えます。「支援につながらなかった子どもの終着点」を象徴しているように思われます。

清太と節子の母親は空襲によって全身火傷を負います。包帯には蛆がわき、亡くなった母親は野焼き同然に茶毘にふせられます。このことは医療や衛生、死者の弔いについて社会基盤が機能不全に陥った「限界状況」にあることを意味します。社会の機能不全は子どもを追い詰めていきます。

14 歳の清太と 4 歳の節子は、西宮に住む叔母の家に身を寄せます。おばさんの家には娘と勤労奉仕をする下宿人の青年がおり、二人には具の多い雑炊と白米を食べさせますが、清太と節子には殆ど具のない雑炊が差し出されます。おばさんは二人に厳しい言葉を投げかけます。

「お国のために働いている人の弁当と、一日中ぶらぶらしているあんたらと、なんで同じや思うの」

お国や地域、家族の為に役に立つ存在は一人前の扱いがされますが、働かず、学校にも行かない清太と節子は疫病神扱いされて、自分たちだけで防空壕で生活する道を選びます。

疎開や配給の情報は、隣組に入らなければ得られません。子どもだけで生活する場面は幼い観客にはわくわくする展開のようにも見えます。大人の理不尽さに屈することなく、集団と同化することで生存を選ぶよりも、清太は子どもらしい自立心とプライドを優先して、孤立していきます。

大人の目線でこの場面を見ると、無謀さが目につきます。しかしそのリスクを、清太はリアリティをもって認識できていません。周りの大人が若気の至りを諷める言葉を発しますが、本気で二人を連れ戻そうとはしていません。

戦時下の「限界状況」では、栄養・衛生・医療・住居等の生存基盤が機能しません。余裕がない状況では、勝手な行動をする子どもは切り捨てられてしまいます。

西宮のおばさんの態度は「助けてもらいたければ、良い子にしておけ」というメッセージとなります。しかしこの「良い子」は大人の意思に従う存在にすぎず、個性がありません。

幼い観客は、おばさんを悪人、清太と節子をかawaiiそうと見るかもしれません。しかし「限界状況」では、誰もがこのおばさんのようになる可能性があります。

「火垂るの墓」には清太と節子の無邪気な遊びの場面がたくさん登場します。

ドロップの缶を鳴らしたり、川遊びやままごとをする場面もあります。混乱した状況下でも、子どもらしい安心と日常の回復をもたらす遊びの力を表しています。

蚊帳の中に蛍を放ち、光に目を輝かせる二人ですが、翌朝には、蛍は皆死んでしまっています。儚さを嘆きながらもお墓を作る場面は、弔いとごっこ遊びが結びついています。節子が蛍のお墓を作るシーンに、母親の遺体をたくさんの遺体と共に穴に入れて、焼く場面がフラッシュバックします。

清太がオルガンを弾いて節子を喜ばせていると、叔母からひどく叱られるエピソードもあります。

「欲しがりません、勝つまでは」がスローガンの状況下では、陽気に遊ぶことは不謹慎だとしか捉えられません。ですが、限界状況を生きるためにはむしろ遊びこそが生きる力をもたらすものとなります。それを抑圧されることは、子どもらしさを奪うこととなります。さらに14歳の清太が4歳の節子の世話をする状態は、今日ならヤングケアラーの問題とも重なります。

清太はやがて農家から窃盗をしたり、焼夷弾で焼ける家に泥棒に入ったりします。米軍のB29に「もっとやれ」とはやし立てる清太の姿は、「限界状況」で生きるなかで善悪や道徳の規範意識が薄れてしまう状態を示しています。「限界状況」では、私たちも清太のように行動することになるかもしれません。やがて節子は栄養失調で倒れ、日本の敗戦を知った清太も力を失い、三宮の駅で力尽きてしまいます。

昭和20年9月21日夜、ぼくは死んだ。

再び、作品冒頭のセリフです。「火垂るの墓」は清太の死の場面から始まっていました。死んだ清太は時折作品の中に現れ、二人のエピソードを走馬灯のように見えています。つまり観客がこの作品を見るとき、清太は「幽霊」のような存在になって、私たちとともに生前のエピソードを見ているのです。

敗戦後の日本では戦災孤児が駅や闇市周辺に野宿し、かっぱらいや恐喝をする状態が社会問題化しました。かれらについて、戦時中は「国児」と呼び、国で保護する案がありましたが、敗戦後には「浮浪児」とみなされ、強制的に保護されて施設送りにされました（「狩り込み」といいます）。収容施設も急造したバラック建てや古い工場を利用したものなどで、ボロボロの室内に収容定員の何倍もの子どもが押し込まれ、食事も十分に取れない状態で、脱走する者が続出したといえます。

戦争がひとたび始めれば、一般市民の甚大な被害をもたらします。戦争がいけないことは火を見るより明らかですが、勇ましい人たちは「戦争をしないため」を口実に軍備拡大を求めます。間違っ使用することは絶対にないのでしょうか。

私たちは、仮に最前線で戦わされなくても、清太と節子のように儂く命を落とすかもしれませんし、西宮のおばさんのように生きるかもしれません。相手国でも、一般市民の状態は同様でしょう。

『火垂るの墓』の清太は、叔母宅で我慢をしていればよかったのでしょうか。あるいは親が残した預金を早く下ろせば二人は助かっていたのでしょうか。実際には、福祉的な支援につながる情報へのアクセス（配給や相談、行政への窓口）、そして何より温かい年長者の保護や伴走が欠けていたのではないかと。保育と福祉を学ぶ筆者はそのように考えてしまいます。

最期に、読者に三つの問いを送りたいと思います。

- ① 清太と節子の行動のうち、現代の社会資源があれば変わり得た選択は何だろうか。
- ② 作品の誰が、どの場面で第三者による介入として有効なものを差し伸べられたか。
- ③ 現代の私たちの社会で、地域の子どもの安全網はどのような状態になっているか。

紹介作品：『火垂るの墓』監督/脚本：高畑勲（1988）

原作：野坂昭如（1968）『アメリカひじき・火垂るの墓』文藝春秋

参考サイト：高畑勲「見た人はそこに怯えてほしい 火垂るの墓、意地悪なおばさんの真実」2025年5月23日、朝日新聞デジタル

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com